自閉性障害者の感情理解に関する実験的研究

井 村 安 之

I 問題と目的

Rutter, M. の言語・認知障害説以来，自閉症研究は自閉症を発達障害と捉え，主として言語や認知能力に焦点を当てたものが中心となっていた。しかし，近年に至り，自閉性障害児・者の追跡研究や発達性言語障害との比較研究，正常知能の自閉性障害児・者の研究から，これまでの言語・認知障害説では，自閉性障害児・者の社会的障害について説明できなくなってきた。そして，Rutter (1983) 自身が，従来の言語・認知障害説に加え，社会的認知の障害を主張することとなり，研究の中心は自閉性障害児・者の社会的・対人的および感情的な領域に移ることとなった。

社会的障害には様々な側面があるが，Kanner を初めとして，他者の気持や考えなどの内的な状態が理解できないことが臨床的に認められている。この点について，最近の研究は，Hobson, R. P. らの感情認知の研究や Baron-Cohen, S. らの役割取得能力の研究を中心に，自閉性障害における社会的障害の研究が流行と言って良いほど盛んに行なわれている。しかし，そこでは自閉性障害の基本障害を特定化しようという方向で進められているため，他者の理解についての個々の要素が扱われ，全体として他者の感情理解を捉えられていない。また，自閉性障害児・者の障害は欠落したままであると考え，発達し，変容していくという発達的視点をとっていないように感じられる。自閉性障害者であっても，発達していくのであり，自閉性障害者を全体的・発達的に捉えていくことが必要であり，このような視点なくしては，自閉性障害者は理解できないものと考える。そこで，本研究においては，発達的視点を加えるとともに，他者の感情の理解能力を全体的に捉えていくことにする。そして，その理論的な背景として，正常児の共感性や役割取得能力の発達研究からの知見を利用することにする。

正常児の発達研究の知見から，役割取得能力は，共感性の認知的な側面を包含する概念であると考え，本研究においては，感情認知や感情についての役割取得能力のことを，包括的に「感情理解」と呼ぶことにする。さらに，その発達の様相は，自他が区別できない理解の段階から，自他を区別しての理解の段階へと発達していくと考え，ある状況において自他が区別できずに，状況という共通の視点に準拠しての感情理解を「状況準拠型感情理解」，自他を区別して他者の視点に準拠しての感情理解を「他者準拠型感情理解」とし，感情理解は状況準拠型感情理解から他者準拠型感情理解へと発達していくものとする。

従って，本研究においては，自閉性障害者の感情理解の発達を，正常児の発達の枠組みを用いて，自閉性障害者の感情理解の発達段階を記述するとともに，その発達の在り方について検討することを第1の目的とする。また，自閉性障害者の感情の理解に関する研究はあっても，それを実際の社会的能力や自閉症状などの臨床像全体との関連で論じた研究は少なく，実際の全体的な発達の中で，感情理解の能力を捉えていくことが重要であると思われる。そこで，やや探索的ではあるが，上のようにして捉えられた感情理解の発達段階，或いは感情理解能力と現在の全体的な発達水準及び社会的能力といった臨床像との関連を明らかにしていくことを第2の目的とする。

II 方法

被験者は自閉症成人施設に入所中の自閉性障害者21名であり，平均CAは23.3歳，平均IQは52.9である。本研究における感情理解能力は，2つの実験により測定された。実験Iは，他者準拠型感情理解を扱い，実験IIは状況準拠型感情理解を扱っている。実験は，両方とも例話と同時に理解を助けるため例話を描画化した図版が示され，その主人公の感情にあった表情図を選択するという方法がとられた。実験Iでは，最初に主人公の内的特性が示され，次ぎに状況が示され，最後に感情を問われるというものであるが，1つの課題につき主人公の内的特性のみを換えた，例話が2話示されることにより，同じ状況であっても主人公の内的特性によって，感情反応が違うことが理解できるかどうかを測定した。一方，実験IIでは，状況のみが示され，主人公の感情が問われるというものであり，状況から感情が理解できるかどうか測定した。

臨床像は，自閉症状の発達水準と社会的生活能力の2側面かや捉え，それぞれ名大式自閉児発達尺度 (NAUDS) および，SM社会生活能力検査により測定された。なお，これらの評定は，被験者の属する施設の職員によって行われた。

III 結果と考察

1. 自閉性障害者の感情理解

実験Iから，本実験課題が実施可能であったのは，軽

度精神発達遅滞以上のIQの高い者に限られ，被験者数も11名と少ないため，本実験の結果及びその解釈は一つの可能性として示唆するにとどめておく。結果より，自閉性障害者は，精神年齢が高くなるに従って，状況準拠型感情理解から他者準拠型感情理解へと移行していくことが示された。つまり，自閉性障害者も正常発達と同じ順序で状況準拠型感情理解から他者準拠型感情理解へと発達していることが示唆された。しかし，正常児の役割取得研究と比較すると，自閉性障害者は，知的な精神発達水準相応の他者準拠型感情理解が困難であることが推察される。また，他者準拠型感情理解が困難である理由については，本実験課題の性質から，相手の内的特性の正しい保持がなされていないという事態は否定できるので，相手の内的特性は正しく保持できてはいるが，自己の感情を統制できないため，自分と同じ感情を答えてしまうということが考えられた。この考えは，中枢の抑制コントロールの欠如が，自閉性障害者を強迫的にさせていると論じられていることとも一致しているようであり，今後，他者準拠型感情理解における自己の感情統制について，さらなる研究が望まれる。

実験Ⅱの結果から，状況のみを手がかりにして相手の感情を理解する状況準拠型感情理解について，精神年齢が高くなるに従って，状況準拠型感情理解能力も高くなっていることが示された。このことから，自閉性障害者であっても感情理解能力は一様に欠如しているのではなく，正常児と同じように発達していくことが明らかになった。さらに，精神年齢が9歳以上の者は，全員が全課題で正解を得ているという結果が示され，状況からの相手の感情の理解に問題のない自閉性障害者も存在していることが示唆された。また，感情の内容別の理解については，positive な感情理解の方が，negative な感情理解より，容易であるという傾向が見られた。これらの結果と正常児の研究結果を比較してみると，自閉性障害者は知的な精神発達水準相応の感情理解が困難であることが推察されるが，感情の内容については，正常児の発達と同じ傾向があることが示唆された。

2．自閉性障害者の感情理解と臨床像との関連

1）他者準拠型感情理解と臨床像との関連

他者準拠型感情理解能力はIQとの関連が最も強かった。従って，本課題から測定された他者準拠型感情理解は，かなり知的な要素が大きいことが推察される。また，NAUDSとの結果から，他者準拠型感情理解と全体的な発達水準との関連は，いくつかの項目で相関がみられた。丸井ら（1976）は，NAUDSの人格発達モデルを設定しているが，それによるとⅠ領域（L1，A1，E1，Em）は人格の中核的な特性であり，これをベースにして発達するⅡ領域（A2，E2，Ad1，Ad2，C，Ey）があり，Ⅲ領域（L2，PS，St）は，自我を防衛・補償するかのごとく生起している病理的行動特性として捉えられている。このモデルによって，結果を解釈すると，Ⅰ領域にあるような中核的な特性の中でも，感情表出（E1）といった感情に関わる要素を礎石とし，Ⅱ領域にある行動の統制（A2）がなされていることが，他者準拠型感情理解を可能にしていると考えられる。そして，他者準拠型感情理解の程度が高くなると，自我を防衛していたⅢ領域にある病理的行動が減少していくものと言える。また，社会的生活能力は集団参加能力との関連が見られた。

2）状況準拠型感情理解と臨床像との関連

状況準拠型感情理解能力も他者準拠型感情現解能力と同様にIQとの関連はみられたが，重回帰分析の結果から，IQ以上に言語能力（L1）や常同行動（St），病理言語（L2）の多さの要因が大きく関連していることが示された。NAUDSのモデルにより理解すると，Ⅰ領域の言語能力（L1）をベースにして，状況準拠型感情理解の程度が高まり，他者の気持が少し理解できるため，人とのかかわりをもつ不安が少なくなり自我の防衛も緩やかになりⅢ領域の常同行動（St）が減少するが，その反面，自閉性障害者にとって感情というようなことはやはり受け入れ難く，新たに防衛せざるをえなくなり病理言語（L2）が増加したものと思われる。常同行動が減少し，病理言語が増加したことについては，常同行動の方が，病理言語より発達のレベルが低いからであると考えられる。また，感情の内容別にみると，positive な感情の理解よりも，negative な感情の理解のほうが全体的な発達水準との関連が強いことが示された。さらに，状況準拠型感情理解能力と社会生活能力との関連については，ほとんど関連がみられなかった。

NAUDSの人格発達モデル

Ⅰ 領 域	Ⅱ 領 域	Ⅲ 領 域
L1 言語表現様式	A2 目的的行動と統制	L2 病理言語
A1 自発性とエネルギー	E2 感情の統制と連続性	PS 同一性保持
E1 固さと感情の分化	Ad1 大人への働きかけ	St 常同行動
Em 共感性	Ad2 大人への反応	
	C 仲間との関係	
	Ey 視 線	